

文献紹介

山田安彦著：『ケントゥリア地割と条里』

大明堂 1999年6月

A5版 173頁 本体2,400円

本書は、『古代東北のフロンティア—東北日本における律令国家と蝦夷の漸移地帯に関する歴史地理学的研究—』（古今書院、1976年）、『古代の方位信仰と地域計画』（古今書院、1986年）などを著し、我が国における代表的な歴史地理学者の一人である山田安彦先生によって執筆された、古代歴史地理学の専門書である。内容は、そのタイトルからも知られるように、非常に広い視野に立って書かれたものといえる。山田先生によれば、研究テーマには、その分析に要する期間によって大きく三つの類型があるという。その一つは、1年もしくは2～3年で一応研究が完成する短期間のもの、二つ目は5年前後の期間を要する研究、さらに三つ目は、10年以上あるいは30～40年の長期間を要する研究である。そして本書のテーマを完結するためには、このうち三つ目の期間を要すると位置づけられるが、まさにそのとおりであろう。本書は、かつてユーラシア大陸の東部と西部とにおいて施行された、タイプの異なる2つの方格地割を相互比較するという、非常に壮大な視野と幅広い構想に基づいて執筆された研究の成果である。

山田先生が初めてケントゥリアに関する論文をまとめられたのは、『人文地理』11巻1号、1959年（「ケントゥリアの形態と測量」）においてであった。しかし、この論文を含めた初期の成果に直接たどりつくまでもなく、このような壮大なテーマを着想された素地は、その後の先生の著作から容易にうかがい知ることができる。例えば、先の『古代東北のフロンティア』では、古代律令国家の拡大・進展に伴う東北地方の地域構造の変容を、畿内的な視点からではなく、漸移地域の視点（東北地方からの視点）から考察された。律令国家や条里制に関する当時の研究の多くが、畿内からの視線の延長線上にあったのに対して、先生のこうしたフレッシュな見方が、ケントゥリアと条里制とを比較するという、壮大な研究テーマの着想と深く関わっているのである。

さて、本書の構成は、以下のようになっている。はしがき

- 1 土地割形態の比較研究の意義
- 2 土地割研究の試論的課題
- 3 ケントゥリアと条里の比較研究
 - (1) 比較研究に着眼した小川・藤田説
 - (2) マイツェンとウェーバーによる影響
 - (3) 源泉探求を試行した米倉説
 - (4) 比較研究への試行的私論
 - a ケントゥリア地割の形態と測量
 - b ケントゥリア地割の持続性の要因
 - c 巨視的に観察したケントゥリア地割遺構分布の問題点
 - d 巨視的にみたケントゥリア地割の分布と地形
 - e ケントゥリア地割の分布と古代道路
 - f ポー河流域を微視的に観察した地形と地割と古道
 - g ケントゥリア地割遺構景観の変貌
- 4 わが国におけるケントゥリア研究
- 5 海外における条里研究の動向

本書成立の経緯

Significance in Distribution of Roman Centuriated Land Allotments

それでは、目次の配列に沿って、本書の内容を通覧してみよう。

まず、ケントゥリア研究を進展させるための不可欠な研究として、ケントゥリア分布地域の範囲とその分布構造を明確にすること、ケントゥリア関係の資料と文献の所在を明示し、それらの研究の回顧と展望を行うことが必要であるとする「はじめに」に続いて、第1章では、比較研究の意義に関する定義付けを行っている。それによれば、歴史地理学における比較には二面の規範があり、その一つは平面的な比較で、他の一つは垂直的な比較であるという。すなわち、前者は同時代における地域間の比較を意味し、後者は同地域における時間的断面の比較を意味している。こうした定義は、本書の中核を成す第3章(第4節)におけるケントゥリアの分布論的考察と深く関わっている。

また第2章は、ケントゥリア地割・条里地割といった、タイプの異なる2つの方格地割を比較する際の具体的留意点と、比較の意義について力説した部分といえる。これら第1章・第2章は、ともに4ページにも満たない短い構成であるが、本

論である第3章の分析を意義づけるための理論的な考察の部分とみなされる。

続く第3章が、本書の中核を成す部分であり、全体は4節に区分されている。そのうち第(1)～(3)節は、主としてケントゥリア地割に関する先学の諸研究をレビューしたものである。ここでは、日本人研究者として小川琢治、藤田元春、米倉二郎らの業績が詳細に検討され、また我が国におけるケントゥリア研究に大きな先導的役割を果たしたヨーロッパの学者として、アウグスト・マイツェン、マックス・ウェーバーらによる成果を評価している。

第3章の中でも、とりわけページを割いて力説を試みているのが、第(4)節である。本節は、a～gの7項目に分けられ、本書に掲載された図・地形図の大半がここで紹介されている。分析の中心は、ケントゥリア地割の分布とその具体的遺構、分布範囲に関するものである。そもそもケントゥリア地割は、古代ローマの植民地に施行されたため、その分布範囲はかつての植民地の領域とほぼ一致する。具体的には、西はブリテン、北はライン・ドナウの流域、東は小アジアやシリア、南はアフリカ北岸である。このうち、本書で具体的に分析されているのは、ケントゥリア地割の遺構が明確で、かつ広域的に分布している北イタリアとその周辺の平原についてである。中でもポー河流域に関しては、その南岸と北岸とに分けて、詳細な地割の分析・考察がなされている。その結果、ケントゥリア地割の遺構は、ポー河流域縁辺山麓丘陵の末端から平地へと移行する緩傾斜面地帯に、比較的広範囲にわたり団地的に分布していること、リミテス（ケントゥリア区画の内部を小さく区切る区割りの道路）の方位は、全面にわたり同一方向ではないこと、等高線に関係なく、緩傾斜や微地形を無視して施行されている場合が多いこと、また地割の方位は、同一平野の小河川流域内の単元的地域内においても、小河川を介して地割の方位が変わる場合があること、などの事実が指摘された。

第4章と第5章とは、本論を踏まえてのケントゥリア・条里地割に関するそれぞれの研究レビューで、我が国におけるケントゥリア研究、海外における条里研究の成果を、総合的に評価したものである。また最後の英文は、イタリアおよび千葉大学の雑誌にそれぞれ掲載された論文を骨子とした、欧米研究者向けの論説となっている。この内

容は、本書の第3章第(4)節とほぼ同一とみなされる。以上、内容を簡単に紹介してきたが、参考・引用に用いられた論文数は非常に多く、その中には日本語・英語論文ばかりでなく、イタリア語・フランス語等によって書かれた成果も多数含まれている。

一方、本書の通読を終えた後で感じた課題も、いくつか指摘しておきたい。第1点は、あまりにも第3章に重さが置かれたために、やや章立てがアンバランスになったことである。あるいは他の章に比べて分量の多い第3章の部分を、2～3の章に分けることも一案だったのではないかと思われる。第2点は、本文中に図番号の指示が無く、どこで本文と図とを対応させるべきかが、やや分かりにくかった点である。本文中の該当個所に図の参照番号が明記されていれば、さらに読みやすかったのではないかと悔やまれる。また、図中に本文の記述に応じた地名（河川名、道路名などの）をもう少し多く記入していただければ、さらに分析・考察の迫力が感じられたのではないかと惜しまれる。いずれにしても、このような点は、本文の説得力を大きく崩すものではないことを、ことわっておきたい。

順序は前後したが、最後に「本書成立の経緯」について、触れておく。この部分には、先年亡くされた奥様のことが繰り返し記されており、本書に掲載された地図類の作成等に当たっても、しばしば奥様の協力を得たことが紹介されている。おそらく先生にとって、ケントゥリア研究は、奥様との思い出のひとつきわ深いテーマであったことが拝察される。ここに改めて奥様のご冥福をお祈りさせていただくとともに、一方では、今後、先生の心の中の奥様と「二人三脚」で、この壮大なテーマに関するご研究を是非続けていっていただきたいと切にお願いしながら、筆を置きたいと思う。
(片平博文)

奈良地理学会編：

『大和を歩くーひとあじちがう歴史地理探訪』

奈良新聞社 2000年11月

A5版 339頁 本体1,800円

「大和は国のまほろば」、歴史地理学を志す者にとって、奈良県は憧れのフィールドである。巻末に付された参考文献をながめれば、いかに多くの歴史地理学者が奈良県をフィールドにしてきたことか、よく理解できる。創立75周年を記念して、